

# 大胆と小心（中）

——伊勢物語とその歌——

上野 英二

## 六

世の中に絶えて桜の無かりせば春の心はのどけからまし

『伊勢物語』八十二段の「右の馬の頭なりける人」、彼は「桜の花盛り」、満開の桜の花の前に、「心」「のどけ」  
くなかった。

「世の中に」。

「世間無常」の「世の中」、満開の桜も常住不変ではない。彼は、桜の花の満開の只中に、その無常を想い、不

安と焦燥に駆られて平静を失ってしまう（第五章参照）。

落花を目の当りにするのならば、満開の桜の前に、平静を失うというのは、どういうことであろうか。

満開の桜の前に、平静を失う、その典型は、梶井基次郎（一九〇一—一九三二）に指を屈するであろう。すなわち、その『桜の樹の下には』（初出一九二八）。

『桜の樹の下には』の「俺」は言う。

（前略）桜の花があんなにも見事に咲くなんて信じられないことぢやないか。俺はあの美しさが信じられないので、この二三日不安だった。

「爛漫と咲き乱れてゐる桜」、今を盛りに咲き乱れる満開の桜を前に、かえって不安に駆られてしまう、と彼は言う。

彼は、続ける。

一体どんな樹の花でも、所謂真つ盛りといふ状態に達すると、あたりの空気のなかへ一種神秘的な雰囲気撒き散らすものだ。それは、よく廻つた独楽が完全な静止に澄むやうに、また、音楽の上手な演奏がきまつてなにかの幻覚を伴ふやうに、灼熱した生殖の幻覚させる後光のやうなものだ。それは人の心を撲たずにはおかない、不思議な、生き生きとした、美しさだ。

しかし、昨日、一昨日、俺の心をひどく陰気にしたのもそれなのだ。俺にはその美しさがなにか信じられないもののやうな気がした。俺は反対に不安になり、憂鬱になり、空虚な気持ちになった。

「桜」が「爛漫と咲き乱れてゐる」にも拘らず、それ故に不安になる。

それは、何という繊細な感受性であろう。これもまた、小心と言うべきものであろう。

『伊勢物語』八十二段の男の、「のどけ」からずと言う実感もこれに通ずるものがあつたのではないか。彼もまた、満開の桜に不安と焦燥を感じる、繊細な感受性の持主であつた。

そうした彼等の心理とは、如何なるものであろうか。

『桜の樹の下には』の「俺」は、「灼熱した生殖の幻覚させる後光のやうなもの」、「不思議な、生き生きとした、美しさ」に酔い、かえつて不安に駆れられてしまふ、と言う。

その不安は、どこから来るのか。

「俺」によれば、「一体どんな樹の花でも、所謂真つ盛りといふ状態に達すると、あたりの空気のなかへ一種神秘的な雰囲気撒き散らす」と言う。また、「灼熱した生殖」は、「後光のやうなもの」を「幻覚させる」と言う。その狂おしいまでの官能の美、得体の知れない妖しい美しさ。その発散するものに、人は心乱されるのである。「爛漫と咲き乱れてゐる桜」、すなわち生の絶頂の極み、生の横溢が、人を感じさせるといふことなのである。そして、それへの共振、共鳴が、人の理性を狂わせ、感性を惑わせる。その惑乱の中に、日常意識下に押し込められていた不安が呼び覚まされ、頭を持たげる。それが、敏感な人の不安を掻き立てる、ということなので

はないか。

「灼熱した生殖の幻覚させる後光のやうなもの」、「それは人の心を撲たすにはおかない」。古来、桜花の美しさには、しばしば妖気や狂気が揺曳することがあるが、それも、こ<sup>1</sup>ういう機制の延長に位置付けられるであろう。

「俺」はまた言う。「俺にはその美しさがなにか信じられないもののやうな気がした。俺は反対に不安になり、憂鬱になり、空虚な気持になつた」。

では一体、その不安とは、何故のものであつたか。

それには、『桜の樹の下には』の「俺」自身がすでに答えを見出していた。「俺」は言葉を続ける。

しかし、俺はいまやつとわかつた。

お前、この爛漫と咲き乱れてゐる桜の樹の下へ、一つ一つ屍体が埋まつてゐると想像して見るがいい。何が俺をそんなに不安にしてゐたかがお前には納得が行くだらう。

馬のやうな屍体、犬猫のやうな屍体、そして人間のやうな屍体、屍体はみな腐爛して蛆が湧き、堪らなく臭い。それでゐて水晶のやうな液をたらたらとたらしめてゐる。桜の根は貪婪な蛸のやうに、それを抱きかかへ、いそぎんやくの食絲のやうな毛根を聚めてその液体を吸つてゐる。

何があんな花卉を作り、何があんな蕊を作つてゐるのか、俺は毛根の吸ひあげる水晶のやうな液が、静かな行列を作つて、維管束のなかを夢のやうにあがつてゆくのが見えるやうだ。

——お前は何をさう苦しさうな顔をしてゐるのだ。美しい透視術ぢやないか。俺はいまやうやく瞳を据ゑ

て桜の花が見られるやうになつたのだ。昨日、一昨日、俺を不安がらせた神秘から自由になつたのだ。

「この爛漫と咲き乱れてゐる桜の樹の下へ、一つ一つ屍体が埋まつてゐると想像して見るがいい」、「何が俺をそんなに不安にしてゐたかが」「納得が行く」。

世に有名な、彼の立言、

桜の樹の下には屍体が埋まつてゐる！<sup>(2)</sup>

それが、「俺をそんなに不安にしてゐた」。

しかし、それがどういふことなのか。生に対する死の対置か、はたまた美に対する醜の対置か、それは必ずしも分明でない。

それを理解するためにここに注目すべきは、二十世紀フランスの思想家、ジョルジュ・バタイユ（一八九七—一九六二）に、これに通じる見解が見出されることであろう。

すなわち、その『ドキュマン』『花言葉』（一九二九）。

彼は、「花々の美は、まさに少女の美より稀ではなく、この植物の器官に特徴的である」と言う、「花々」の「理想的な美」について、次のように述べる。

花そのものも、地面から天空へ向かうこの広大な動きに呑み込まれ、付随的な役割に、そのうえどうやら意味不明な気晴らしへと追いやられている。つまり花は、平板さを打ち碎きながらも、下から上へと向かう全般的な衝動が生む抗いがたい魅惑に寄与することしかできないのだ。ならば心地よい印象を破壊するには、地面の下で蠢き、虱のように吐き気を催させる剥き出し根の、その幻想的で突拍子もない光景グライジョンが必要となる。

確かに根は、植物の見える部分に対する完全な反論となる。見える部分が高貴に上昇するのに対して、おぞましくて粘つく根は、葉が光を愛するように腐敗を愛し、地面のなかで転げ回る。

バタイユもまた、「花」の「心地よい印象」に対して、「地面の下で蠢き、虱のように吐き気を催させる剥き出しの根の、その幻想的で突拍子もない光景グライジョン」を対置する。そして、その「根」は、「腐敗を愛し、地面の中で転げ回る」と言う。

これは、「この爛漫と咲き乱れてゐる桜の樹の下へ、一つ一つ屍体が埋まつてゐる」という、『桜の樹の下には』の「俺」の「想像」に重なるであろう。その「想像」においても、「桜の根は貪婪な蝨のやうに、それを抱きかかへ、いそぎんやくの食絲のやうな毛根を聚めてその液体を吸つてゐる」。

何という符合であろうか。<sup>(3)</sup>両者はともに、美しく咲き誇る花の根元に、腐敗から貪欲に養分を吸い上げる根の存在することを、ありありと想い描くのである。

美しい花を前にしながら、その根元に、「腐爛」「腐敗」のあることを想い、同時に、その根がそこから養分

を吸い上げる様を見てしまう。このような類同が、洋を隔てて東西に見られることは、それ自体興味深いことだが、これらとともに、繊細な感受性によるもの、と言うことが出来よう。

しかし、この類同は、必ずしも暗合ではなかったと思われる。と言うのも、両者には、共通の淵源と言うべきものを見出し得るからである。

すなわち、フランスの詩人、ボードレール（一八二一—一八六七）である。

「明治末期から大正期にかけて」「ボードレールから多くの作家や知識青年が影響されたのだが、萩原朔太郎と梶井基次郎も例外ではなかった」と言う（市川絃美「憂鬱なる桜——櫻の樹の下には」における桜像——『日本文学』（東京女子大学）一〇一号）。

『桜の樹の下には』にボードレールの影響があつたことは、多くの指摘がある。例えば、

（前略）『桜の樹の下には』は、もともとボードレールの影響をうけた作品のひとつとして論じられている。ことに、『巴里の憂鬱』のなかの「射撃場と墓地」は、そのイメージの類似性から、『桜の樹の下には』との関連を繁くにとりあげられる散文詩である。

すると思いつきが彼を捉え、その墓地へ下りて行くように誘った。それほどこの草は茫々と長く伸びて、人を招いているように見え、それほど豊かな太陽がこのあたりを照りつけていた。

果してそこでは、光と熱とが猛威をふるっていた。屍肉によって肥えた、見事な花卉の絨毯の上に、酩酊した太陽が、さも伸び伸びと臥転がついている、とでも云った風に。

〔射撃場と墓地〕三好達治訳、新潮文庫）

「屍肉によって肥えた、見事な花卉」のイメージは、『桜の樹の下には』の必須のモチーフであり、さらに『桜の樹の下には』の「桜の花」と「射撃場と墓地」の「見事な花卉」、「白い日光」と「豊かな太陽（酩酊した太陽）」、「酒宴」と「酒亭」という両者の語彙を対比してみると、『桜の樹の下には』と「射撃場と墓地」との類似性は濃密なものと思われる。

（桐山金吾「梶井基次郎論——桜の樹の下には」の成立とボードレールの世界——『國學院雜誌』第八七卷第一二二号）

すでにボードレールには、『桜の樹の下には』の必須のモチーフ、「屍肉によって肥えた、見事な花卉」のイメージが見出されると言う。「屍体や腐臭を詩美を構成する要素として取り入れたことには、ボードレールの影響を見るのは通説と言ってよからう」（高熊哲也「桜の樹の下には」における詩的表象としての〈桜〉、『金沢大学国語国文』三四号）。あわせて梶井には、朔太郎を介しての影響も考えられるであろう。

特に、『桜の樹の下には』とボードレールの関連については、梶井の友人、伊藤整が、その著『若い詩人の肖像』においてその経緯を語っている。

梶井はある日、下宿の窓によりかかって、ボードレールの作品の話を私にした。

ボードレエルの散文詩がいかに素晴らしいものであるかを、彼は、その中の一篇である硝子売りの話を引いて喋った。

夜になって北川冬彦が戻つて来ると、梶井は北川の室でよく話をしていた。

そのような交遊の中で、伊藤は、『桜の樹の下には』にも通ずる着想を聞いた、と言う。

湯ヶ島で、春に桜の花が素晴らしく美しく咲いている<sup>(4)</sup>。桜の花は、野外では本当に匂いがあたり一面に漂うものだ。その花を見ていると、自分は奇妙な幻想に襲われた。それは、桜の花の根や幹が透明になって、地面の下まで透いて見える、ということだ。桜の幹の中にある数限りない細い管を、樹液が根の方から登って行くのが分る。そして桜の根元の地下に、は色々な動物の死骸が埋まっている。それは鹿や犬や猫や猿や鼠や、色々な動物である。その動物の腐敗した身体の方に、桜の根が生きもののように伸びて行って、毛細管がその死骸にからまっている。そしてその腐った死骸から養分を吸いとっては上の幹から枝へ、枝から花へと送っているのだ。「でなければ、あんなに桜の花が美しいわけではないんだ。それだから桜の花はあんなに美しいんだよ」と梶井が言った。私は聞いていて、彼の話に感嘆した。すばらしい話だ、と私は思った。梶井のその話を聞いていると、桜の花が私の見て来たのよりもずっと美しく思われ、それ自体が生命の爆發であるように思われて来るのであった。

桜の花の幻想は、彼の着想が生れる時の見事な一つの例であり、ボードレエルの散文詩のヴァリエーションを自ら気附かずして作っているのは、彼が一つのイメージを養い育てる経過を示すものであった。

『桜の樹の下には』へのボードレールの影響は大きかったものと思われる。

一方、バタイユにおけるボードレールの影響の大きさは、その著、その名も『文学と悪』（一九五七）の一章が『悪の華』の著者、ボードレールの論に割かれていることによっても知り得るところである。

したがって、『桜の樹の下には』における、「桜の樹の下には屍体が埋まつてゐる！」という「俺」の「想像」も、バタイユの、「花」に対する「地面の下で蠢き、虱のように吐き気を催させる剥き出し根の、その幻想的で突拍子もない光景」、<sup>ワイルコン</sup>「おぞましくて粘つく根は」、<sup>ワイルコン</sup>「腐敗を愛し、地面のなかで転げ回る」という「光景」も、ともにボードレールに触発されたものと考えることが出来る。

東西の繊細な感受性は、こうした共通の契機によつて、それぞれの感受性を刺激され、期せずして、美しく咲く花に対して、同様の「想像」、<sup>ワイルコン</sup>「光景」を見るようになったと考えられる。

彼等は、何故に、そうした「想像」を抱き、また「光景」を見るに至つたのか。

幸い、その消息も、バタイユ自身の所説の中に窺うことが出来る。彼は、「花言葉」において、先に引用した部分に先立つて次のように述べている。

実際、つかの間だけ輝いた後で、見事な花冠は陽光で穢らわしく腐乱して、そうして植物にとつて目障りで萎れた汚点となる。堆肥の腐臭から養分をもらいながらも、花はそれを逃れて、天使のようで叙情的な純潔の高揚へ向かったようにみえたが、しかし突如として、その原初の汚穢に呼びかけるかのようだ。もっとも理想的なものが、空中に現れる堆肥の襖檻滓にすぐさま変わってしまうのである。なぜなら花は、葉のようにそのまま老いることはなく、葉のほうは、枯れた後にさえも美しさをまったく失わないからである。しかし花は、年老いた厚化粧の気取り女のように萎れ、自分を雲へ導くようにみえた茎の上で滑稽に枯れ果てる。

大地と天空の間で際限なく演じられるこの死の劇、そこで際立つ悲喜こもごもの対立を誇張してはならないが、明かに、「愛は死の香りがする」という吐き気を催す陳腐な文句を、言葉としてよりもむしろ、より厳密に言えばインクの染みのように用いて初めて、この取るに足りない対決を註釈することができるのだ。

彼は、「天使のようで叙情的な純潔の高揚へ向かったようにみえ」る「見事な花冠」に、それが、「つかの間だけ輝いた後」、「穢らわしく腐乱して」「目障りで萎れた汚点とな」ってしまう様を見てしまう。それが、「空中に現れる堆肥の襖檻滓にすぐさま変わってしまう」ことを見て取ってしまうのである。

あたかもこれは、前引「見える部分が高貴に上昇するのに対して、おぞましくて粘つく根は、葉が光を愛するように腐敗を愛し、地面のなかで転げ回る」という「光景」<sup>サインコ</sup>を先取りするものであろう。彼は、美しく咲く花に、その腐敗していく様を見、その花がまた腐敗に根を降ろすことによって美しく咲いている様を見て取るの

ある。

「大地と天空の間で際限なく演じられるこの死の劇」。

花は腐敗し、腐敗が花を咲かす。すなわち、生はやがて死に至り、その死はまた生を生み出す、ということであらう。

それについて、バタイユは自ら分析的に述べてもいる。

死とは間違いなく世界の青春である。われわれにそれがわからないのは、わかろうとしないのは、次のようになかなり悲しい理由による——われわれは若々しい感受性を持ち合わせているかもしれないが、それで知性がいつそう目覚めることはない。そうでなければ、死が、死だけが、たえず生の若返りを保証するという事実を、どうして知らずにいられようか。最悪なのは、ある意味でわれわれはこの事実を十分承知しているが、たちまちにして忘れてしまうということである。自然のなかに与えられている法則は、盲目であることが許さないほどに単純である。この法則によれば、生とは噴出であり横溢であり、均衡、安定とは正反対である。それは爆発し枯渇する、喧噪に満ちた運動である。その果てしない爆発が可能なのは、ひとつの条件のもとにある。すなわち、使い古された有機体が、新しい力を持って踊りに参入してくる新たな有機体現場を譲る、ということである。

実を言えば、われわれはこれほど高くつく方式を知らない。生は、はるかに安価に済みますことも可能である。滴虫類の組織に較べれば、哺乳類、なかでも肉食獣の個体組織は、莫大なエネルギーを呑み込み破壊す

る深淵である。植物の生長は、腐敗物質の堆積を前提としていた。草食動物が、何トンもの生命体（植物的な）を餌に食してはじめて、少量の肉が生産され、それが肉食獣に大いなるくつろぎ、大いなる神経のエネルギー消費を可能にする。生命力を生み出す方式が高くつけばつくほど、有機体の生産に濫費が必要であればあるほど、この作用はますます申し分のないものになる、とさえ思われる。

（湯浅博雄・中地義和訳『エロティシズムの歴史 呪われた部分 普遍経済論の試み 第二巻』一九五二<sup>(5)</sup>）  
同様なことは、一九五七年刊行の『エロティシズム』においても述べられている。

死がまた世界の青春でもあるということを、人類は一致して無視している。ほとばしりがなければ生は衰退してゆくのだが、唯一死だけがこのほとばしりを保証しているということを、私たちは目隠しをして見まわしている。生が均衡に対して仕掛けられた罫であり、生が全面的な不安定、不均衡であり、そこへ人をすぐに投げこむものであるということを見まいとしている。生は、絶えず爆発を惹き起こす擾乱の運動なのだ。ただしこの爆発は絶えず生を汲み尽くしてしまうので、生は次の条件でしか続かない。すなわち生によって生みだされた存在たちのうちで爆発力が尽きてしまった存在は、新たな力で存在の輪舞<sup>ロンド</sup>の輪に加わる新生の存在たちに場を譲る、という条件である。

私たちは、これ以上エネルギーを浪費する方法を想像することができない。ある意味で生は可能なことなのだ。つまりこのような莫大な浪費、想像力を打ちのめす無化の贅沢を求めずとも、生は簡単に再生産され

てゆくだろう。

(酒井健訳『エロティシズム』)

バタイユは、「生とは噴出であり横溢であり」、「爆発し枯渇する、喧噪に満ちた運動である」(『エロティシズムの歴史』)と言う。まさしくそれは、湯ヶ島で梶井の「桜の根元の地下には、色々な動物の死骸が埋まっている」という「幻想」について聞いた伊藤整の、「梶井のその話を聞いていると、桜の花が私に見て来たのよりもずっと美しく思われ、それ自体が生命の爆発であるように思われて来るのであった」という感想に直結するであろう。「生命の爆発」。まさしく、梶井の語った「素晴らしく美しく咲いている」「桜の花」、「野外では本当に匂いがあたり一面に漂う」と言う「桜の花」は、「生命の爆発」と言うべきものであろう。それは『桜の樹の下には』においては、「一体どんな樹の花でも、所謂真つ盛りといふ状態に達すると、あたりの空気のなかへ一種神秘的な雰囲気を撒き散らすものだ。それは」、「灼熱した生殖の幻覚させる後光のやうなものだ」として描かれていた。「灼熱した生殖」ということからすれば、その「爆発」とは、性の「爆発」でもあったことであろう。

この「爆発」について、バタイユは注目すべき説明を加えていた。

その果てしない爆発が可能なのは、ひとつの条件のもとにある。すなわち、使い古された有機体が、新しい力を持って踊りに参入してくる新しい有機体に場所を譲る、ということである。

そして、肉食獣が草食獣を捕食し、草食獣は草を摂取し……という、生態学的な一連の食物連鎖を例示する。

そこに、バタイユ『花言葉』の「幻想的で突拍子もない光景」にとっても、梶井『桜の樹の下には』の「桜の樹の下には屍体が埋まつてゐる！」という「想像」にとっても重要な契機と考えられる、「条件」が現れる。

植物の生長は、腐敗物質の堆積を前提としていた。

『エロティシズム』には、より明確に、

植物の成長には、死によって解体され、腐らされた物質が際限なく蓄積されることが必要である。

と述べられている。

ここに、バタイユの「光景」、さらには『桜の樹の下には』の「想像」の由つて来たるところも明らかである。う。

すなわち、美しく咲き匂う花を、「生命の爆発」とするならば、その「爆発」は、多くの「腐敗物質」、幾多の「屍体」によつて支えられている。その事に想い到るとき、そのような「光景」「想像」が、繊細な感受性には、自ら浮かんで来る、ということであろう。

そして、その「爆発」ゆえにもたらされる「不安」。

見事に咲いた桜の花を目の当たりにして、「俺はあの美しさが信じられないので、この二三日不安だった」と

言う、『桜の樹の下には』の「俺」の「不安」。その来由もまた、バタイユの所説に窺うことが出来る。

そもそもバタイユは、「生とは噴出であり横溢であり」、「爆発し枯渇する喧噪に満ちた運動である」と言っていた。彼によれば、元来それは、「均衡、安定とは正反対のもの」であった（『エロティシズムの歴史』）。生とは、もともと「均衡に対して仕掛けられた罫であり」、「全面的な不安定、不均衡であり、そこへ人をすぐに投げこむものであ」ったのである（『エロティシズム』）。だとすれば、そこに不安が生まれるのも、当然のことであろう。

生の不安。

そして、その「噴出」が激しければ激しいほど、「爆発」が大きければ大きいほど、その「不安定、不均衡」が増大することも、そして、それ故の不安が大きくなることも、当然であろう。

バタイユは、特に生を「噴出」と言い、「爆発」と言った。それは、性の「噴出」でもあり、「爆発」でもあったかも知れない。とすればそこにまた、それ故の不安も生まれよう。

『桜の樹の下には』の「俺」の不安も、そうしたものであったと思われる。「爛漫と咲き乱れてゐる桜」、その「生命の爆発」と言うべきものに、彼は感応したのであろう。そして、自身、不安を呼び覚まされ、度を失ったのであろう。そしてまた、「桜の花盛り」を前に「心」「のどけ」くなかった『伊勢物語』の男、彼もまた、そうした不安に駆られた一人であったか知れない。

さらに、バタイユはまた、「浪費」を「渴望」するゆえの「不安」についても、それぞれの著作において言及している。続く一節。

極度の不安にいたるまで、人間の生の運動が渴望しないものはない。極度の不安が、ついに過剰性を帯びる消費の——われわれに耐えうるものの限度を超える消費の——前兆をなす、という点においてそうである。われわれの内なる一切が、死がわれわれを荒廃させることを求めている。われわれはこれら数を増した試練に、理性の観点からすれば不毛な度重なる再開に、一個体の生から他のもつと若い生への空しい移りゆきのなかで成就される、有効な力の大殺戮に、進んで身をさらす。われわれは、そこから帰着するほとんど耐えがたい条件を、苦痛および不可避的消滅へと運命づけられた個体の条件を、熱望しさえする。いやむしろ、あまりに苛酷なためにわれわれの意志がたえず萎えてしまうほどのこの耐えがたい条件が存在しなければ、われわれの心は満たされないであろう。（中略）だれよりも盛んに発言する人々が、生とは死を頂点とする奢侈のなかでは人間の生が他とかけ離れて途轍もなく高くつくこと、結局、生命の安定が薄れ死への危惧が増大したときこそ、破産的洗練の頂点であることを知らない（また、なにがなんでも知らないままでのいた）のである。だが、それを知らぬ彼らが行なっているのは、ひたすら不安を、それがなければ全面的に奢侈に捧げられた生が奢侈ではあっても大胆さを欠いてしまふであろうような不安を、募らせることである。実際、奢侈であることが人間的なことだとすれば、それ自体不安を掻き立てながらも不安によって歯止めをかけられることのない奢侈こそ、このうえなく人間的なものではなかるうか。（『エロティシズムの歴史』）

人間の生は、全体として見るならば、不安に陥るまで消費を渴望している。不安に陥るまで、不安がもはや

耐えられなくなる限界まで、渴望している。(中略) 私たちの内部の厚い擾乱は、死に対して、私たちを犠牲にしてまでその猛威をふるってほしいと願っているのだ。(『エロティシズム』)

この「不安」も、『桜の樹の下には』の「俺」が囚われた「不安」に通ずるであろう。それは、如何なるものか。

『エロティシズム』によれば、「人間の生は」、「不安に陥るまで浪費を渴望している」と言う。バタイユ一流の物言いであるが、これを要するに、「人間の生は」、「浪費を渴望」するゆえに、「不安に陥る」、ということである。

「浪費」とは何か。それは、『エロティシズム』に言う、「エネルギーを浪費する方法」、「生を生み出す方法が浪費的になればあるほど」等と言う、「浪費」。すなわち、例の、生物における食物連鎖、「生によって生みだされた存在のうちで爆発力が尽きてしまった存在は、新たな力で存在の論舞ロンドの輪に加わる新生の存在たちに場を譲る」というときの、生の「浪費」ということになるであろう。『エロティシズムの歴史』の言葉で言えば、「使い古された有機体が、新しい力を持って踊りに参入してくる新たな有機体場所を譲る」ということである。

「爆発」たる生は、生の「浪費」、すなわち死によって成り立っている。生とは、そうした「浪費を渴望」するゆえに、「不安に陥る」と言うのであろう。

「死が、死だけが、たえず生の若返りを保証する」(『エロティシズムの歴史』。「ほとぼしりがなければ、生は衰退してゆくのだが、唯一死だけがこのほとぼしりを保証している」(『エロティシズム』)。生の「浪費」、すな

わち死が、別の生を成り立たせる。とすれば、「生の若返り」を求め、「ほとぼしり」を求めらば、勢いそれは、生の「浪費」、すなわち死を「渴望」することになる。それがまた、「不安」を喚び起こすことになる。『桜の樹の下には』の「俺」は、そういう状態にあつたのではないか。

そう考えるとき、『桜の樹の下には』に言われる「俺には惨劇が必要なんだ」という衝撃的な叙述の意味も自ずと了解されるであろう。

『桜の樹の下には』の「俺」は、例の「桜の樹の下には屍体が埋まつてゐる！」という洞察を得る「二三日前」、「溪間」で「美しい結婚」をし「産卵を終つた」「何萬匹とも数の知れない、薄羽かげろふの屍体」が「隙間なく水の面を蔽つてゐる」のを見て、「俺には惨劇が必要なんだ」という自覚に達するが、その「惨劇」とはそれこそ、「死が、死だけが、たえず生の若返りを保証する」とバタイユの言う、生の「浪費」、すなわち死、ということに相当するであろう。そして、「惨劇が必要なんだ」と言う、その「必要」とは、まさにバタイユの言う「渴望」に対応しよう。そして、それに続く「俺の心は悪鬼のやうに憂鬱に渴いてゐる」とは、その「渴望」を語つたものと考えることが出来るであろう。

生の「浪費」を「渴望」する、と言い、また、「惨劇が必要」と言う。

しかし、それは現実的にはどのようなことか。

それは結局のところ、具体的には、殺傷の願望、乃至は衝動ということではなからうか。それは、「薄羽かげろふの屍体」を見た『桜の樹の下には』の「俺」が抱いた感懐、「俺はそれを見たとき、胸が衝かれるやうな気がした。墓場を發いて屍体を嗜む変質者のやうな惨忍なよろこびを俺は味つた」によつても窺えるであろう。こ

こには殺傷の願望、乃至はその衝動が潜むのではないか。

とすれば、満開の桜の花に不安を感じた「俺」に、同様に「毎晩家へ帰つて来る道で」「小つぽけな薄つぺらいもの、安全剃刀の刃なんぞが、千里眼のやうに思ひ浮んで来る」と言われる、「安全剃刀の刃」もまた、それを暗示するものであったと見ることも可能であろう。

一方、「墓場を発いて屍体を嗜む変質者のやうな惨忍なよろこび」の方には、前引、ボードレルの『巴里の憂鬱』の「射撃場と墓地」の影響が考えられようが、バタイユもまた、『エロティシズムの歴史』において、次のように述べていた。

死者の与える怖れになんらかの欲望が混在しているとすれば、殺人の魅惑がそれに与ったことはたしかである。(中略)死者の与える戦慄に満ちた魅惑には、殺人の欲望が惹起するよりも多くのものが含まれている。先に言及した、未発達で混沌とした祝祭、時として王の死に続いて起こりもするあの祝祭のことを想起してみれば、爆発が引き延ばされるなかで死とエロティシズムと殺人とを結びつける複合体系コンプレックスを把握することができる。

結局、死が解放するこの運動から、つまり一般に生の側に属し、あるがままの屍体の心滅いらせる外観に呼応して顕現する巨大な魅惑の力から、切り離してしまつては、なにも、あるいはほとんどなにも、わからないのである。権威から無力への、存在の毅然とした在り方から不在への、生者の「判読不能」否定的状況

から限度というものの果てしない撤廃へのこの移りゆきは、情念への惑溺と漠たる混沌とに満たされた、万事を忘却に附す、荒々しくも気まぐれな生の回帰を、いやその勝利さえも予告する。暴力が、それを呼ぶ腐敗に呼応して顕現する。解体の虚無が無秩序な情念の巨大な放縦に対して持つ意味は、悲劇のまわりに醸し出される聖なる恐怖のあの光輪に近いものだ。

これほどに全的な混乱の核心は、生が死のうちに無力の様相を取りつつ、実はこれを代価として、限りない奔出のなかに顕現する瞬間に、明らかにされる。それは、ある破壊の力、必然的に生命力に満ち満ちた腐敗物が予告する、瑞々しい繁茂・再生力の基盤をなす破壊力である。若人たちに場所を空けてやるために、共同墓地が死者を呑み込んで一杯になることがなかったら、いったい若人たちは存在しえようか。

言うところはすなわち、「一般に死というものは、生の流れと充溢を加速する」（『エロティシズムの歴史』）とすれば、その「生の流れと充溢」のためには、死が求められる、しかも、生が「限らない奔出」だとすれば、それは、「ある破壊の力」によって求められる、それが、「殺人の魅惑」ともなる、ということであろう。

とすれば、その「殺人の魅惑」、殺傷の願望、乃至その衝動が、不安を喚び起こすのも当然のことであろう。「情念への惑溺と漠たる混沌」に巻き起こる「暴力」。その「暴力」は、それ自体、不安を通り越して、「恐怖」とさえ感じられるであろう。

生命の極み、満開の桜に、その生を掻き立てられた『桜の樹の下には』の「俺」は、その勢いのままに、死を、殺傷を「喝望」した。その如何ともし難い状態を、彼は持て余して不安に陥ったのではないか。

そして、その殺傷の願望、乃至衝動は、恐らくそれに終始するものではない。

バタイユも「死とエロティシズムと殺人とを結びつける複合体系コンプレックス」と言うように、それは、性におけるそれでもあったと思われる。『桜の樹の下には』における、「樹の花」の「灼熱した生殖」、「薄羽かげろふ」の「美しい結婚」、そして「精液のやう」な「冷汗」等々の示唆するところ、「俺には(6)惨劇が必要なんだ」と言う、彼の「喝望」とは、性における、死の「喝望」でもあったのではないか。

そして、そのような願望、乃至衝動を、『伊勢物語』八十二段において見出すことも不可能ではない。

すなわち、八十二段の男が「世の中に絶えて桜の」と詠んだ、その桜は、「いま狩する交野の渚の家、その院の桜」であった。つまり彼がこの歌を詠んだのは、狩の途上であつたのだ。

狩とはすなわち、鳥獣を殺傷することに他ならない。

私見によれば、『伊勢物語』の男は狩を好んだ(7)（拙稿「狩と恋―伊勢物語ノート―」『成城国文学』第一六号）。八十二段の狩も、その一例と見得るであらう。

その狩について、ポール・シェパード『狩獵人の系譜 反農耕文明論への人間学的アプローチ』は、「狩獵と愛、捕食と交合(8)」の連関において、次のように述べている。

両者は深奥からほとばしる生命の情熱、殺しとオーガズムのもつ悪魔的瞬間をともなっている。こうした二つの激しいのちの表現には、関連がある。両者は生と死に通じ、それはあたかも、男性的なものと女性的なもののように基本的両極性をあらわしている。

まさしく狩もまた、本質的に「深奥からほとばしる生命の情熱」、「殺し」「のもつ悪魔的瞬間をともなっている」のであった。とすれば狩を好んだ『伊勢物語』の男の心の深層に、殺傷の願望、乃至は衝動が潜んでいたことは想像に難くない。彼もまた、生の「浪費」を強く「喝望」する一人であつたのではないか。ただし八十二段においては、「狩はねむごろにもせで」と言う。この時、彼の、狩に託そうとしたそうした願望は必ずしも達せられることなく、不完全燃焼のままに終わっていたかも知れないが。

それはいずれにしても、このように考えるとき、『桜の樹の下には』の「俺」が見出した、

桜の樹の下には屍体が埋まつてゐる！

という発見は、単に生態学的な「想像」を語つたものに留まらず、まさしく言葉の通り、生は死に根ざし、生の根元には死があつて、生を成り立たせていることを語つて、本質を穿つたものであつたと言ふことが出来るであろう。彼自身、「爛漫と咲き乱れてゐる桜の下へ、一つ一つ屍体が埋まつてゐる」という「想像」によつて、「何が俺をそんなに不安にしてゐたかが」「納得が行く」と証言していることによつても、そのことは証明されるであらう。

それは、まさしくバタイユの所説とも照応する。

生はいつも、生の解体がもたらす産物なのだ。生はまず死に依存している。というのも、死が生のために場所を残すからである。次に生は死のあとの腐敗に依存している。というのも腐敗は、新たな存在が絶えずこの世に生まれてくるのに必要な養分を循環させるからだ。

（『エロティシズム』）

そしてさらに、その生の「浪費」とは、食物連鎖における「一個体の生から他のもつと若い生への空しい移りゆき」の中に留まらない。生の「浪費」というものは、その身自身にも及ぶのである。

その生の「浪費」を、『エロティシズム』は、「地獄のサイクル」として例示していた。

滴虫類（原生動物の繊毛虫類などの旧称）の生体に較べれば、哺乳類の生体は、莫大な量のエネルギーが消費される深淵であるが、この莫大な量のエネルギーは、他のさまざまな可能性の発展を許しているという点では、無に帰したことはない。しかし私たちは、地獄のサイクルを窮極まで思い描いてみるべきなのだ。植物の成長には、死によって解体され、腐らされた物質が際限なく蓄積されることが必要である。草食動物は、生きた植物を山のように平らげてから、今度は彼ら自身食べられて、肉食動物の旺盛な食欲を満たすことになる。最終的にこの獐猛な破壊者以外に何も残らない。あるいはその遺骸が今度はハイエナと蛆虫の餌食になるといだけの話だ。この流れに合致した見方をすると、生を生み出す方法が浪費的になればなるほど、新たな生体の算出にエネルギーがかかればかかるほど、ことは成就したということになる！

（酒井健訳『エロティシズム』）

食物連鎖の頂点に立つ、「最終的」な「獯猛な破壊者」も、やがては「ハイエナと蛆虫の餌食」となって「浪費」される。生の「浪費」は、「地獄のサイクル」を描いて、結局その身に還るのである。

不安が人間というものを形作っているようにも思える。いや不安だけではない。乗り越えられた不安、不安を乗り越えることが人間を形作っているようにも思える。生は本質において過剰さだ。生とは生の浪費のことだ。生は限りなく自分の力と資源を使い尽くす。生は、自分が創造したものを際限なく減ぼす。生ある存在の多くはこの運動のなかで受動的である。しかし極限においては私たちは、私たちの生を危険にさらすものを決然と欲する。

（『エロティシズム』）

これらを敷衍すれば、つまり生とは、その身が生きるそばから崩れ去り、死んで行くものなのである。バタイユは、「生とは噴出であり横溢であり」、「爆発し枯渇する、喧噪に満ちた運動である」と言ったが、「噴出」し、「横溢」し、「爆発」すれば、「枯渇」することを免れない。生きることは、半面で死んでいくことでもあるのだ。

生を燃焼と言うならば、その燃えるそばから、生は消尽して行くのである。すなわち、死。その死と引き換えに、生は美しく輝くのである。

そして、燃焼するものが大きければ大きいほど、それとは裏腹に、消尽するもの、すなわち死も大きく自覚さ

れることとなる。そこにまた、不安が生まれるのであろう。生と裏腹の死の感取、そこに不安が喚び覚まされる。

今を盛りに咲き誇る花。常人ならば、その美しさを無邪気に楽しまれる花も、繊細な感受性は、それに安閑としていることは出来なかった。全盛の中の、滅亡の不安。彼は、生の絶頂の只中に、不安を感じて、平静を失ってしまうのである。

思えば、『伊勢物語』八十二段の「馬の頭なりける人」、「桜の花盛り」を前に、「心」「のどけ」くなかった男。彼もまた、そうしたことに鋭敏な感受性の人ではなかったか。

世の中に絶えて桜の無かりせば春の心はのどけからまし

彼は、「桜の花盛り」を眼の当たりにしながら、不安に駆られ、平静を失うのであった（第四章参照）。彼の抱いた不安、それも結局のところ、生と、それと裏腹の死の不安ではなかったか。それは、バタイユの感受性にも通うであろう。バタイユも、前引「花言葉」において、「美しい花」について、「実際、つかの間だけ輝いた後で、見事な花冠は陽光で穢らわしく腐乱して、そうして植物にとって目障りで萎れた汚点となる」、「もつとも理想的なものが、空中に現れる堆肥の糞穢にすぐさま変わってしまう」と言い、そこにやはり、「大地と天空の間で際限なく演じられる」「死の劇」を見てしまうのである。

「世の中に絶えて桜のなかりせば」「のどけからまし」と歌った、『伊勢物語』の男も、「桜の花盛り」の只中

に、死を感じ取っていたのではないか。

しかし、だからと言って、『伊勢物語』の男に、『桜の樹の下には』の「俺」の抱いた、「桜の樹の下には屍体が埋まつてゐる！」という「想像」や、バタイユ記すところの、「腐敗を愛し、地面のなかで転げ回る」<sup>ワインマン</sup>「根」の「光景」が現れることは無かった。

もとより『伊勢物語』の男には、それらの原基となったであろう、生態学的知見も無かったであろうし、ポードレールの詩想を知る由もない。

では、それを識らぬ、彼の感受性はどこへ向かったか。

彼の感受性は、むしろ、バタイユが「美しい花」に見出した「死の劇」と同じ方向へと向かったようだ。彼の見出した「死の劇」、それは具体的には、「桜の花の早く散る」ことであった。<sup>(9)</sup>「桜の花の散るゆゑに、心のどかならず」。彼の、「桜の花盛り」に感じた不安は、具体的には、その「早く散る」ことへ向かったようだ。

「世の中に」。

その「世の中」とは、「世間無常」の「世間」<sup>よみな</sup>なのであった。その「世の中」にある以上、何物も世の無常を免れない。人は死に、満開の桜もやがては散る。

「桜の花盛り」に抱かれた彼の不安は、彼には無常感として感じられた、と思われる。

世の中にさらぬ別れの無くもがな

その「世の中」とはまた、人に死のあることを痛切に実感させた、無常の「世間」<sup>よのなか</sup>でもあった（第五章参照）。その点では、彼の抱いた不安もまた、「世間無常を悲しむ」という、伝統的な無常感（第二章参照）に回収されて行つたと思われる。

無常感。

古来、仏教説くところの、無常観ならぬ、無常感が、日本人の感受性の特徴として挙げられて来た。

諸行無常は従つて、諸行はそもそも無常なものであるといふやうな認識、確知としてではなく、諸行の無常性に詠嘆する、或ひはその無常性に感情的に同感するといふ風に受取られた。『言海』では、「ものゝあはれ」に対して、「物ごとくに心を傷ましめ、深き思ひを誘ふ情景。もののおもむき」といふ解をつけてゐるが、諸行無常もまさにそれと同様に受取られた。或ひは受取られた場合が多かつた。（唐木順三『無常』）

無常観は本来それだけで成立する観念ではない。諸行無常に対するものとして、常住真実なるもの即ち仏性がある。無常を観じたゆゑに、仏法に帰依する。或は逆に仏法に帰依することで、無常観といふ認識能力を授けられる。こゝでは信仰が第一義の問題であつて、美感は第二義の問題である。しかし一般的に言へば、無常観は、「感」として「美感」として、深く作用して行つたのではないか。<sup>10)</sup>（亀井勝一郎『歴史の星々』）

しかし、それは、多く「詠嘆」であり、「美感」であつた。

例えば、第四章で採り上げた、「桜の花の早く散るゆゑに、心のどかならず」ということを詠む歌は、多く無常への「詠嘆」であり、それを「美感」として詠出するものであった。

しかし、彼の抱いた不安は、いわゆるそれらの無常感とは一線を画して異っていた。

それらの歌に対して彼の「世の中に」の歌だけが、独り「桜の花盛り」にあつて詠まれていたことは、やはり注目すべきことであろう。<sup>(11)</sup>

生の只中を感じる、死の不安。それは、彼にとつては、切実な実感だったのである。

彼の無常感は、単なる「詠嘆」や「美感」などではない。それは、死の不安の実感に根ざすものであった。

世に、「無常感」と言い、「無常美感」と言う。

しかし、こうした『伊勢物語』の男の切実な実感を想うとき、それは、単なる「詠嘆」や「美感」という美的、観念的なものに終始するものではなく、本来的には、死の不安に起因するものであったことを、あらためて知るのである。

仏教の無常観は、諸行の無常、すなわち諸行一般の無常を説く。諸行一般の無常、それはすなわち「現世の物の些細で取るに足りないこと。または、短かくてはかないこと」であると、『日葡辞書』も言う。しかし、彼には、その最も切なるもの、すなわち人の死が、まさに無常として実感されたのであった。

それもそのはず、「無常」とはすなわち、結局のところ、その究極、「死ぬこと」であったのである。

すでに『日葡辞書』には、「無常」即「死ぬこと」と明確に示されていた。

無常 すなわち、常無し。現世の物事の些細で取るに足りないこと。または、短くてはかないこと。また、死ぬこと。  
(土井忠生他訳『邦訳日葡辞書』)

## 七

「爛漫と咲き乱れてゐる」「桜」を前に、不安に陥った『桜の樹の下には』の「俺」。

生の絶頂の極みに、かえって掻き立てられた不安。その不安に、彼はどう対処したか。

彼は、その「桜の樹の下に」「一つ一つ屍体が埋まつてゐる」という「想像」をすることによって、「何が俺をそんなに不安にしてゐたか」、「納得が行」き、「俺を不安がらせた神秘から自由になつた」、と言う。そうして始めて、「今こそ俺は、あの桜の樹の下で酒宴をひらいてゐる村人たちと同じ権利で、花見の酒が呑めさうな気がする」と言う。

一方同様に、「桜の花盛り」に、「心」「のどけ」くなかつた『伊勢物語』の男、「酒を飲みつゝ」とは言え、不安と焦燥に気もそぞろ、彼もその酒に気楽に酔うことは出来なかつたであろう。彼は、そうした不安にどう対処したのか。

もとより彼に、「桜の樹の下には屍体が埋まつてゐる」などという「想像」の浮かぶ由も無い。その時彼は、そのいたたまれなさをどうしたか。

世の中に絶えて桜の無かりせば

彼は、その、彼の心を掻き乱した、桜自体をいつそ消し去り、無い物にしようとしたのであった。

「もの皆移ろう、この無常の世から、すっかり消えて無くなってしまうたら」と、その不安もろとも、その元凶となった桜自体を抹消しようとしたのであった。それが、彼の「想像」であった。不安を掻き立てる状況自体を否定する以外に、彼には、なす術が無かったのであろう。

さらに、彼にとっての一層直接的な不安、人の死への不安に対しても、彼は同様の反応をするばかりであった。

世の中にさらぬ別れの無くもがな

すなわち、自らの死を強く意識して、一目会いたいと言う母からの危急の便りに、彼は、その死自体を無い物にしようとした。それ以外に、やはり彼にはなす術が無かったのである（以下第五章参照）<sup>(12)</sup>。

そして、その死へと至る、老いの到来についても同様。

昔、いと若きにはあらぬ、これかれ友だちども集りて、月を見て、それがなかにひとり、

おほかたは月をもめでじこれぞこのつもれば人の老いとなるもの

(八十八段)

月が積もつて老いとなる。名月も、彼にとっては無常を感じさせる、不安の種でしかなかった。まして彼は、すでに「いと若きにはあらぬ」。

「おほかたは月をもめでじ」と、彼は、その月から目を背け、それをまた無い物にしようとしたのであった。

恐らく、この「友だちども」の方は、安閑に月に興じていた。しかし、「それがなかにひとり」、敏感な彼だけが、月に無常を感じ取り、それを無い物にしようとしたのであった。

残念ながら、『桜の樹の下には』の「俺」のように、「桜の樹の下には屍体が埋まつてゐる」という、「想像」を持つには至らなかつた彼は、「花見の酒が呑めさうな気がする」と言った「俺」のように月見の酒に酔うことは出来なかつたのであろう。<sup>(13)</sup>

あるいは彼は、その老いを、無常を感じさせる桜の花もろともに消し去ろうともした。

昔、堀河のおほいまうちぎみと申す、いまそかりけり。四十の賀、九條の家にてせられける日、中将なりける翁、

桜花散り交ひ曇れ老いらくの来むといふなる道まがふがに

(九十七段)

「堀河のおほいまうちぎみ」とは、藤原基経。その「四十賀」、それには長命を祝うにふさわしく、恐らく「桜

花」の時節が扱ばれていた。男はそこで、基経のさらなる長寿を祈る壽ぎの歌を詠んだ。にも拘わらず、彼は、「桜花散り交ひ曇れ」と、桜の散ることを歌う。桜花の賀でありながら、ここでも彼は、それを手放して謳歌することは出来なかつたと思われる。

このとき彼は、八十二段、「世の中に絶えて桜の無かりせば」の場合と同じく、「桜花」を前に、「心」「のどけ」くなかつたのであろう。やはり、咲き誇る桜に、かえつてその花の無常、そして人の無常を感じ取つて、不安に駆られたのではないか。

この段では彼自身、「翁」と呼ばれていた。彼にとつても、老いは切実な問題であつたのである。彼は、「桜花」の生の極まりに、かえつて自らの死、すなわち「老いらく」が迫り来ていることへの不安を感じ取つていたのではないか。

彼はその不安を、それを掻き立てる「桜花」ごと消し去ろうとした。

#### 桜花散り交ひ曇れ

彼は、迫り来る無常を逆手にとつて、いっそその花を散らす。落花狼藉、花吹雪の幻影の只中に、老いの来ることを消し去ろうとしたのであつた。それがこの時の、彼の「想像」であつた。

それは、何と華麗な「想像」であろうか。

今井源衛『王朝の歌人3 在原業平』も、これを「それにしてもなんとという美しさだろう」と讃嘆している。

それにしてもなんとという美しさだろう。青ざめた死神の顔と、それをヴェールのようにおおおう桜吹雪のイメージは、死と歓楽との隣りあつた人生そのものである。日本の詩歌のなかに、これほど純粹で、これほど強烈に死と老醜に抵抗する姿勢を示したものを、私はほかに知らない。坂口安吾の小説『桜の森の満開の下』には、桜花と屍とがとりあわせてあるが、その虚無的な美の淵源は、このへんにあるのではないだろうか。

「桜花と屍」の「とりあわせ」は、坂口安吾『桜の森の満開の下』を溯つて、梶井の『桜の樹の下には』に至るべきであろうが、この指摘は、この歌の本質に迫つて、傾聴すべきものであろう。<sup>(14)</sup>

この歌に歌われた「想像」は確かに、「桜の樹の下には屍体が埋まつてゐる！」などという「想像」をはるかに超えた、華麗な「想像」ではあつた。

しかし、いずれにしても、否定、無化、抹消、無視。彼には結局のところ、無常を前にして、それを無い物とする以外に無かつたのである。<sup>(15)</sup>

だが、「想像」は、所詮「想像」でしかない。

これを八十二段「世の中に」の男の歌に対して詠まれた「ある人」の歌、

散ればこそいとゞ桜はめでたけれうき世に何か久しかるべき

に較べるならば、それは何と云う違いであろう。

この歌は、無常を物ともしない。無常感に囚われることもない。むしろ無常を積極的に受け容れて、それを克服して行こうとした（第三章参照）。これに較べるならば、この男の弱気、意気地無さが際立つて来る。<sup>(16)</sup>

それはまさしく、繊細にして懦弱。

これもまた、男の小心と言うべきものであろう。「世の中に絶えて桜の無かりせば」という、「大胆な仮想」も、結局のところは、その小心の裏返しであった、と見る事が出来る。<sup>(17)</sup>

### 注

(1) あら見事や候ふ 今を盛りと見立て候ふ なか／＼の事花は今が盛りにて候ふ またこゝに面白きことの候ふ  
女物狂の候ふが 美しき掬ひ網を持ちて 桜川に流るゝ花を掬ひ候ふが けしからず面白う狂ひ候ふ

（謡曲「桜川」）

昔、鈴鹿峠にも旅人が桜の森の下を通らなければならぬやうな道になつてゐました。花の咲かない頃はよろしいのですが、花の季節になると、旅人はみんな森の花の下で気が変になりました。

（坂口安吾『桜の森の満開の下』）

「それで桜の満開の下を歩いたりするのが怖い。葉の出ないうちに花だけで咲く染井吉野なんて、朧月の下では見るからに妖気が漂っている感じでしょう？」  
 (倉橋由美子『春の夜の夢』)

染井吉野だから、見上げると、花だけが白い妖気を漂わせて雲のように夜空に広がっている。／＼「こういう桜は人を狂わせますね」(中略) この花の下で満月の夜を明かしたら、月光と花の精との相乗作用で間違いない狂気にとりつかれるだろう。  
 (同『花の下』)

「桜の樹の下には屍体が埋められている」(中略) 「屍体を埋めると、桜がよう咲くようになるのですか」／＼「人の血や肉を、養分として吸いとるのかもしれない」／＼「桜がですか」／＼「狂ったように咲くのも、人間の狂気がのり移ったとも考えられるし……」  
 (渡辺淳一『桜の樹の下で』)

「桜の木の下には、死体が埋まってるんだっけ？」(中略) 「桜の花は人を狂わせるんだよね。悪い人も怖い人も桜の花は怖いんだ。桜のこと書いた話は怖いけど綺麗だよ。さらってきた女の人が、首で遊ぶのもそうだよ。桜の花の咲く頃に鬼が来るとか言わない？」(中略) 「いろんな人が桜のこと書いたの読んでさあ、どれがどれだかつながんないの。ねえ、坂口安吾のは鬼だっけ？ 狂うんだっけ？ 怖いんだっけ？」

(堀田あけみ『愛をする人』)

(2) 「下」(した／もと)、「埋まって」(うづまって／うまつて)の訓みは、なお確定的でないと思われるが。

(3) 『桜の樹の下には』の「俺」は、「何があんな花弁を作り、何があんな蕊を作つてゐるのか」と、花に見入る。それに対して、バタイユも、「花冠の形状と色彩が表すもの、花粉による雌蕊の瑞々しさが露わにするもの」に目を注ぐ。

(4) この桜は、ソメイヨシノだと言う（小川和佑『桜の文学史』）が、『桜の樹の下には』の「桜」、バタイユ論ずるところの「花」、『伊勢物語』の「桜」は、必ずしもその品種を詳らかにしない。しかしいずれにしても、本稿で論ずるところは、原理的に通用し得るであろう。

(5) 「バタイユは本書を「一九五一年の版」と呼んでいる。そしてバタイユは三部作の第三卷『至高性』を構想し始めた段階で、エロティシズムを主題とした書物を新しい形で起草した。それは「一九五四の版」と呼ばれている。一九五七年にバタイユはこちらのほうの版を基にして『エロティシズム』を出版したのである」（湯浅博雄『「エロティシズムの歴史」をめぐる走り書き——訳者あとがきに代えて——』『エロティシズムの歴史』）。

(6) 性における殺傷の願望、乃至衝動は、自らにも及ぶと思われる。バタイユは言う。

不安のなかで死に脅かされている人間は、性行為の可能性に病的に誘惑されている修道士の状況を想起させる。あるいは、動物界では交尾飛行の雄バチの状況を想起させる。この雄バチは、敵ゆえに死ぬのではない。女王バチめざして光のなかを進む激しい情熱ゆえに死ぬのだ。修道士の場合でも雄バチの場合でも、少なくとも問題になつてゐるのは、瞬間の閃光のなかで死に挑みかかるといふことなのだ。 （『エロティシズム』）

(7) 『伊勢物語』初段においても、「狩」に出た男は「いとなまめいたる女はらから」に、「狩衣の裾を切りて歌を書き

てやる」が、ここにおいても「恐らく男は、鋭利な刃物を以って自らの狩衣を切り取っている」(前掲拙稿「狩と恋―伊勢物語ノート―」)。

(8) 「愛と狩獵」の根底には、性欲と食欲という、生物としての人間の自己保存のための二大本能があった」(前掲拙稿「狩と恋―伊勢物語ノート―」)。

(9) 僧正遍昭にも、

散りぬれば後は芥になる花を思ひ知らずも惑ふ蝶かな

〔古今和歌集〕卷十・四三五

の詠があるが、これは「僧正」ならではの発想によるものであろう。

(10) 同書はさらに、「無常感」、「無常美感」の先に「無常哀感」のあったことに言い及ぶ。

(11) 壬生忠岑にも、

君はたゞ我にて知りぬ花盛り心のどけき人は知らじな

(忠岑集・一六九)

の詠があるが、これには「世の中に」の歌の影響が考えられる。

(12) 下の句には、「千代もと祈る」と「祈る」ばかりであった。なお、永続を願う心情は、

植ゑし植ゑば秋無き時や咲かざらむ花こそ散らめ根さへ枯れめや

(五十一段)

などにも見られる。

(13) 満ちれば欠ける月について、ニコライ・ネフスキー『月と死』は、

支那及び日本、殊に日本は大自然に恵まれ、夏期過度の太陽の熱に苦しめられる者は、周囲を囲む凡ての丘陵森神社仏閣、さては山寺の夕の鐘の響きにびつたりと調子を一つにする純潔な白い姿の月に心を向ける。

静かな、青ざめた月の光は、これらの地方の住民を、安逸と自足とを告げる昼の太陽から遠ざけて、花やかな現

実より、遠く離れたるものを思はしめ、終には世の中の歡樂喜悅は永劫のものでなく、何時か最後が訪れること、信ぜしめる。燃ゆる強い光を有する太陽、生の力——陽の限りなき供給者太陽と打つて変つて、単調な冷い光に包まれてゐる太陰は、正反対の陰の力——死の力を明白に表してゐるものとして眺められてゐる。

と云う。

(14) 鈴木日出男『伊勢物語評解』も、

八十段の男は、その典型であつたと言ふことが出来よう。

この歌そのものは、協調的な明るさのなかにも、得体のしれないかげりをはらませている。誰しもが避けがたい老齡を思わざるをえないという趣を含んでいるからである。

この章段の歌は、老いを人格化したのみならず、さらに趣向を凝らして、まず「散り」「曇れ」「老い」などという祝賀にはあるまじき言葉をあえてとりこむところから始まる。ところが後半になつて、それを逆に「まがふがに」と反転させる大胆なまでの機知をきかせたのだ。この表現の機転によつて、無数の桜の花びらの散りかう華麗さのなかに、底知れぬ不安と憂愁も直感させられてくる。ここまでくると、人間存在の普遍の、光と影が見え出してくるであらう。饗宴のなかに埋没することの出来ない人間の、孤立する心までもがおのずと表現されているのである。

と云う。

(15) あかなくにまだきも月の隠る、か山の端無くば月も入らじを

同じく八十二段、敬愛する惟喬親王が寢所に入ろうとするのを引き止めようとした男は、月を親王に見立て、その月

の入るべき「山の端」を「無く」すことを詠じている。

また、

昔、男、京をいかゞ思ひけむ、東山に住まむと思ひ入りて、

住みわびぬ今はかぎりとし山里に身を隠すべき宿求めてむ

五十九段で、「京を」「住みわび」た男は、「東山に」「身を隠」そうとした。この、「身を隠」すも、同様のものと考えられようか。とすれば、これに類似する、

京にありわびて東に行きけるに、

身を要無きものに思ひなして、京にはあらじ、東の方に住むべき国求めにと行きけり。

(九段)

等の東下りも、同様に考えられよう。

また、六段、

白玉か何ぞと人の問ひし時露と答へて消えなましものを

大胆にも「二条の后」と覚しき、「女のえ得まじかりけるを」、「辛うじて盗み出で、」という逃避行に突き進んだ男。しかしその恋がひとたび崩れ去るや、彼は「足摺りをして泣」くばかりであったが、「露と答へて消えなましものを」、その絶唱においても、彼は、自身を消し去ろうとするのであった。

(16) これは、「恋においては、その胆、大にして盤石の気概を持って突き進む『伊勢物語』の男」(第四章)からすれば、対照的な側面であるが、その両面は、「女のために盤石の強気を見せた男も、ひとたび女を失って孤立無援となつて共同体を敵に回すや、からつきし意気地なく弱気の虫に転落してしまう」(拙稿「渡河の情景―伊勢物語ノ―ト―」『成城国文学論集』第二十八輯)点に、すでに現れていた。

(17) ラファエル・フォン・ケーベル『ケーベル博士隨筆集』参照。

日本の国民的花は、堅い、硬ばった、魂なき、萎むを知らざる菊ではない、絹のように柔らかなる、華奢なる、芳香馥郁たる短命な桜花こそ実にその象徴である。日本人はこの美しき花の束の間に萎みそうして散りゆくその中に、わが生の無常迅速の譬喩と、わが美と青春との果敢なきを見るのである。桜の花を眺めているとき、春のたゞ中に秋の気分が彼の胸に忍び入る。彼にしてもドイツ文学に明るいならば、彼は恐らく『美しきものまた死せざるべからず』というシラーの詩『ネニエ』（哀歌）か、または『黄ばめる葉は顫えゆらぎ、木の葉散りゆく、——あわれ、すべての優雅なるもの、いとしきものは滅びゆきて墓の中に沈むなり』というハイネの歌か、またはかのガイベルの感嘆すべき小歌謡に想い到るであろう。私は日本の読者のためにこゝにその全文を引きたい。

『そはげに日の光うら、かなる日なりき、

五月の樹々に花咲き、

汝が眼は愛のよろこびを語りぬ、——

さわれ、そは過ぎゆけり。

すべての樹は花萎みぬ、

秋は歩みはやく来れり、——

夢は、美しき夢は

風吹き散らしぬ。』——

さらに同書は、

日本人は、たといホラティウスを知らなくとも、自らこう考える。我らの生は、今風に吹き散らさるゝ花のごとく短い。我らの思い設けざるとき早くも我らは『万物の最後の境界線』(ultima linea rerum 即ち死)に達しているのである、されば『今日の一日を捉えよ』(carpe diem) 一つの歓楽をも逸する勿れ、『膝のなおすこやかなる間』(dumque virent genua) にすべてを享樂せよ!と。

と言う。これは、「散ればこそ」の歌に通じようか。

付記 本稿成るに当って、令和七年度成城大学特別研究助成を受けた。